

思い出すままに

平川 金四郎

このたび、幹事の小田垣さんから何か九州支部発足当時の模様を語る小稿を書くようにとの依頼を受けた。多難な時代で紆余曲折はあったが、支部の活動に結びつく思い出を語るとなると、私は適役ではないし、たとえ書くにしてもこれは大変である。私自身が発足当時どういう研究生生活を送ったかを中心にして、出会った人々のことどもを話せとなると、これはそう骨の折れることではないので、引き受けたが、これで、何となく当時の様子をかいま見ていただけたら幸いである。

私は昭和20年3月九大理学部物理学科に入学した。郷里の山口高校を出るとき恩師から九大には武藤俊之助や原島鮮など錚々たる偉い先生方がおられるから是非ここを選んだがよいと言われた。この恩師の一人は、かつてボーアの原子核液滴模型に反して殻模型的思考で飛び抜けた業績を挙げられた彦坂忠義先生（日本物理学会誌47（1992）993参照）であった。こんなお方が旧制高校の教授をされていた時代である。九大の物理は歴史の浅い教室ではあったが、それほどに地方にあっても魅力のある存在であったようである。ひとえに陣容である。教室の入学式で始めて教授陣の御顔を拝見することとなったが、冒頭、伊藤徳之助教授から、ワインにはヴィンテージというのがあって何年産のは良いが何年産のは悪いなどといわれる、君たちも出来の悪いワインにならんように望むとの話があった。ところが皮肉なことに、われわれ昭和23年卒は出来が悪いということでは評判の、しかもこれは全国的なものであった。3年の高校生活を戦時中のこととて2年で繰り上げ卒業した組であったからである。

大学へ入ってからも、酷いもので、先生方には軍に協力させられた方もあり、時々帰っては集中講義をなさるという有様であった。福岡に来た当時は空襲警報の連続であった。皆鉄製のヘルメットを被り通学した。夏に入る前、南薬院の下宿で空襲にあったが、何と言っても不安だったのは広島への原爆の直後で、次ぎの標的はきつと福岡だということで、以後いざというときに備えてなるべく建物の陰の方を歩くという日々が続いた。その頃既に各研究室はトラックに諸道具をつめこみ大分県の豊後森へと疎開し、われわれは空虚な大学に取り残されたといった有様であった。戦争が終ると、やっと授業が軌道に乗ってきたが、今度はたまたまようもない食料難の苦しみに見舞われ、われわれの在学中それはピークに達した。その頃の思い出の一幕を紹介しよう。

当時は選択科目が多く量子力学も選択であった。これは武藤教授が担当されたが、これも終りごろは集中講義であった。先生は日本の物性論の草分け的存在で、

かつアメリカ帰りのなかなかダンディな方で、ハンチングにパイプ姿、一方話術はまことに巧みで、講義は他学部からも聞きに来る人が多く、しばしば立つ人も出るほどの超満員であった。今私の手元にその時のノートが残っている。昭和21年5月8日開講とあるから2年生の時である。いま見ると左程でもないが、基礎知識のないわれわれにとってはかなり難解であった。ある講義時間中、入り口のドアをコンコンとノックする音がした。先生は「はい」と答えて教壇から降りてドアを開けに行かれた。そしたら何と小犬だった。みんなどっと笑った一幕もあった。さて、原島先生は当時液体論の第一人者で、力学の本でも早くから有名であった。われわれは、力学、熱学、統計力学を習ったが、木造2号館での真冬の講義はつらかった。先生も学生もオーバーを着たままで必死でノートを取った。先生の掛けボタンの穴が大きく開いて今にも外れそうだったことや、歩かれる後を行くと、先生の靴の踵が何時もパクパクするので有名だった。私達の総勢十数名の同級生には藤永茂君はじめ本質的には秀才の名に恥じない人が多かったのであるが、なにせ不幸な学年ではあった。ひもじいのでクローバ等の雑草を煮て食うと本物の野菜の有難みがわかった。自分はこのまま卒業しては大学卒の名に恥じるからと、自ら進んでもう一年留年した人も少なくなかった。私もそうすべきだったと思うが、農地改革で一挙に田畑を失って生活の苦境にあえぐ父にこれ以上学資を無心する気にはどうしてもなれなかった。卒業後は家には一切頼らないと決意して研究者生活入りした後の数年は私にとっては文字道理のどん底生活で、今でもよく切り抜けたものだと思う。この間なんとか私が生きて来られたのは、ひとえに周りを取り巻く人々や、友人の好意の賜である。

私は卒論研究に岡田利弘先生の研究室を選んだ。当時物理教室は全て木造の建物であったが、原子核関係の二つの建物だけが鉄筋コンクリート造りであった。その二階が岡田研で、そこで当時としては新しい分野の半導体がテーマであった。その分野の研究を強く示唆されたのは武藤教授であったが、今日のような隆盛をみるとは、当時夢にも思わなかった。不純物を制御する技術のない時代には、試料ごとに実験結果が大幅に異なる。それで極端なことを言えば、どんないいかげんなデータでも受け入れられるという悪い癖のつくことを私は恐れた。後年、磁性体の研究へ向かったのはそのためでもある。私は先生にお願いして卒業後も研究室に残させていただいた。学生だった21年の夏の夕刻、先生は私を散歩に誘われ、始めて武藤先生が東大（後に物性研所長）へ移られることになったと打ち明けられた。大物を失うといった感じの先生の心の動揺は私の眼にもありありと伺われた。続いて野上茂吉郎先生も去られ、遂には原島先生も去られるなど、一気に空気が変わった。そして岡田研は岡崎篤義先生の研究室に合流されて大きい半導体講座となった。

ところが昭和25年頃だったと思うが、先生は御病氣にかかれ長期（1～2年

間)の療養生活に入られた。君は磁性体の研究をやらないかと言われ、こまごまとした指示は何も与えられなかった。しかし、岡田研だけの輪講には当時としてはあまり実験する期待の持てそうにない中性子散乱の勉強も取り上げられていたから、それは卓見というほかはない。一方先生が入院される少し前だったと思うが、阪大から永宮健夫先生(日本の固体論の大家)が非常勤講師として来られ、岡田研究室では一夕先生をお招きして、グラスがないので実験用のつぼに赤玉ポートワイン(当時ワインといえばこれしかなかった)を注ぎ歓談した。私がじかに先生にお会いした最初である。講義と違って物理的にずっと飲み込めるお話は、まさに快刀乱麻を断つごとく、一気に魅せられてしまった。岡田先生の御入院中、放り出されたような私は、ふと中村伝さんと親しくなった。うちの輪講に来ないかと誘われ、以来その輪講を傍聴させて貰ったのである。氏の輪講はじっと聞いているだけでも、大変骨の折れることであった。というのは、出てくる式のチェックは全部手抜きなしに行われるので、われわれ実験屋には分からないところも多かった。1時半に始まると延々7時近くまでも続くのが普通であった。終ってほっとすると、「平川さん、帰りませんか」と誘われる。下宿が近かったせいでもある。一転して道すがら、話は方向を変える。荷風の雨蕭蕭はいいよ、墨東綺譚を読みなさい、今度は鴉外の阿部一族についての講釈が始まるかと思うと、モームの月と6ペンスは是非読みなさいと言われる。これは気にはかけながら読んだことがなかった。定年になってから初めて原文で読んでみて感激した。中村さんの博覧強記はすごいもので、Suhl・Nakamura 相互作用の発見や磁性の本が出たのもそのころである。そうしたあるとき、二度目の永宮先生の御来講があり、中村さんはもともと阪大におられたので先生とは親しく話しておられたが、そのおり、脇で聞いていた私に「平川さん、ネールさんは日本に来られたとき、ピロタイトの単結晶(鉍石)を差し上げたら大変喜んで帰られましたよ。一つ何か単結晶が作れないものですかねえ」と言われた。若かった私は全力を上げて取り組もうと決心した。そしてセレン化鉄の単結晶製作に成功し、岡崎篤さんがX線回折によってその空格子の規則配列の観測に成功し、私は磁気容易軸が結晶主軸からそれることを見出した。単結晶を作ったの磁性研究特に化合物のそれは日本では初めてで、以後続々各地でこの種の研究が行われるようになった。これを機に私の周りは大きく変わった。私は中村研の影響を受けてフッ化物磁性体の研究を始め、これは以後何年も続く。一方中村さんは阪大で学位を取られるとすぐ九大教養部へ、続いて私も阪大で学位を貰って教養部へ、そしてまた理学部へ戻るとすぐに当時世界の衆目を集めていた英国のハーウエル研究所へつかわされた。ここに一年過ごしたあと、私は後任に岡崎篤さんを推薦した。私は帰国後すぐに、工学部に新設された電子工学科へ移り、中村さんも阪大に移られたので、この頃から理学部と次第に別れることとなる。理学部の岡崎、岡田研からは後輩の

平川一美、橋本魏洲両氏の協力をいただき、教養部時代、工学部時代まで研究を熱心に支えてもらった。私が去ったころ、理論では森、川崎両氏が世界に冠たる業績をあげて九州の名を高められた。

勉強の方はさておき、いろいろ面白いこともあった。私はヴァイオリンに魅せられて、我流でギコギコやっていたら、誘われて九大オーケストラに入ってしまった。そしたら何と松村さんも入っておられた。私もひどいがあの人のもひどいもの（ただし、読符力はなかなかで、落ちずについてこられた）であった。定期演奏会のときは、モーニング姿で出演せよということなので、私は原島先生に服を拝借に行った。先生は快く貸して下さった。今思うと恥ずかしくなる。指揮は今よく話題に上る石丸寛さんで、よく叱られていたから、よく覚えていて下さった。十年以上も後のこと東京の駒場までで電車の中でひょっこり会って懐かしく話した。この道楽は今も続いている。絵も好きだった。水野研には松倉保夫さんという御人がおられ自他共に許すなかなかの腕前で、時々お伺いしては、絵の談義に時をわすれた。その豪放磊落な笑い声は独特のものであった。

1945年九大物理教室に入学してからもう52年の歳月が流れた。在学中岡田先生から今度数物学会から転じて物理学会という名のもとに新しく発足すると聞かされた。そのころは九州地区の物理支部会の空気も今とは随分違っていた。講演会の予告は1×2メートルばかりの用紙に毛筆で書かれ掲示板に貼りだ出された。それを書くのを何度か手伝った。そのときはたとえ教授であろうと武藤俊之助君や原島鮮君「何々について」というように君呼ばわりで、座長もそう読み上げていたように思う。学問研究の上では皆対等の志を同じうするものという意味だろうか。講演件数は毎回せいぜい10件くらいだった。当時の様子を語る写真が皆無に近いのは、写真が今日のように出回っていなかったこともあるが、第一お偉い先生にカメラを向けるような気にはとてもなれなかったせいでもある。それから、色々なことがあった。それぞれに皆それぞれの思い出があろう。しかし、何時も輪講で机を並べて勉強していた私の周りの若い人達が今ではそれぞれに思いも寄らなかった道を辿り業績を挙げられた。もう鬼籍に入られた先生方、私よりも若くして今年の春他界した同じ研究室の吉松君のことなど思うと胸が痛くなる。地方は地方で特色のある発展を期待したいし、何よりも人と人とのふれあいを大事に育てて行きたい。この欄をかりて諸兄弟のご幸運を切にお祈りしてやまない。